

聖体の祝日
ヨハネ 6・51-58

2014.6.22 9:30 ミサ
長崎 壮
(クラレチアン宣教会助祭)

今日は聖体の大祝日です。そして高円寺教会では、4人の子供が初聖体の恵みをいただくことになっています。

助祭職の大切な使命のひとつは“みことばの奉仕”つまり、神の“みことば”そのものであるイエス様に対する奉仕であり、また、聖書に収められた“みことば”を用いて皆様のために行う奉仕ですから、今日は御聖体について“みことば”の観点からお話しさせていただきます。

第一朗読では、「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」(申 8・3)とあります。

それなのに福音では、イエス様は自分自身を天から降ってきた生きたパンであると宣言して、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」(ヨハネ 6・54)と仰います。

第一朗読で「人はパンだけで生きるのではない」とあるのに「イエス様自身が自分自身をパンにたとえるのは一見矛盾しているように思えますし、何か変だなあ・・・」と誤ってしまいそうですが、イエス様は「わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである」(ヨハネ 6・55)と、わたしたちが通常口にする食べ物とは別であることを教えてください。

ところで、ヨハネ福音書の冒頭を見てみますと、小見出しに太字で「ことばが肉となった」とイエス様を紹介しています。

つまり、イエス様は人となった“みことば”そのものなのです。

それにしても、ヨハネ福音書において、今日の福音朗読の箇所を含む6章は、イエス様が「人を生かすまことのパン」であることをくどいほど何度も繰り返し説明します。

説教を準備するためにこの箇所を読んでいた時に私が感じたことは、「イエス様のこの説明の仕方は、お母さんが赤ちゃんに食べ物を食べさせようとする時の方法に似ているな」ということです。

お母さんが赤ちゃんにご飯を食べさせようとする時、お母さんは「はい、誰々

ちゃん、これは・・・ですよ」と声をかけながら食べさせます。このとき赤ちゃんは、ご飯を食べると同時に、お母さんの愛情のこもった言葉も一緒に食べているのです。

「片付けるから早く食べなさい」という気持ちで食べさせたら子供は育ちません。

こう考えてみますと御聖体についてのイエス様のくどのような説明も「あなたたちの心のなかに共にいたいのですよ。分かりますね・・・」という気持ちの現われのような気がします。

次に、ミサにおいて私たちはパンの形色の中におられるイエス様を具体的な形でいただくわけですが、人間にとって食べるということは、何を意味するのでしょうか。

まず、食べることは人間の生命活動の原点であるということです。食べなければ生きていけません。

そしていったん食べてしまえば、食べたものは自分の体の一部となっていきます。

端的に言えば、食べたものを同化・血肉化していくのです。

創世記でアダムとエヴァが善悪を知る木から食べたということは、「善悪を知る」という特殊な能力を自分たちに同化、血肉化させていくという意味でもあります。

最後の晩餐の席上のイエスの「これを取って食べなさい」という言葉、あるいは今日の福音の中で人々にイエス様を食べるということを繰り返し奨めているのは、アダムとエヴァへの「食べるな」という正反対の命令でもあり、イエス様の存在をわたしたちの内に同化・血肉化していくことも意味します。

このように考えますと、イエス様が御聖体を私たちに与えてくださるということは、御聖体拝領を通じて私たちがイエス様のように考え、イエス様のように愛することができるようになることを要求されているからです。

それでは、どのようにすればそのような要求に応えていくことができるのかを考えてみましょう。

人間が成長していくためには食べる時によく栄養分を吸収し、さらに食べた後には運動をしなければいけません。私たちにとって、栄養分を吸収するのは御聖体をいただいた時の感謝の気持ちだと思います。自分に対する反省

も含めて考えてみますと、ミサが終わってお御堂を出た途端に不平・不満が出てしまうのは、吸収の仕方が足りないからかもしれません。

そして、運動に当たるのが、学校や家庭、職場など具体的な生活の場で御聖体をいただいて、“神のみことば”を内に宿した者として生きることだと思います。

御聖体について「私の肉を食べる者は永遠に生きる」という言葉の意味には、私たちがイエス様の復活に与るということだけではなく、この世の中でイエス様と似た人となって生き、証しするということも含まれているのです。